

1歳になったら、はしかワクチンをしましょう

★はしか（麻疹）は、麻疹ウイルスが感染しておこる子どもの代表的な感染症で、日本では、年間約20～30万人がかかり、そのうち50人ぐらいが死亡しています。

子どもにとって最も怖い病気の1つです。

最もかかりやすいのは1～2歳頃です。

はしか患者の10人に1人は入院が必要と言われています。はしかで入院した患者のうち、60%は2歳未満で、20%は1歳未満の乳児です。

昨年より全国的にはしかが流行しています。北九州でも多くのはしか患者が発生しています。最近、小中学・高校生や成人のはしかも増えています。

★麻疹ウイルスは、患者の咳、鼻水などの飛沫（ひまつ）によって感染します。非常に強い感染力を持っています。

感染して症状が出るまでの期間（潜伏期）約10～12日です。

最初は38～39℃台の発熱、せき、鼻水、目やに、結膜充血などのかぜによく似た症状で始まります（カタル期）。

3～4日ぐらいすると口の中に赤みを伴った白い小斑点（コプリック斑）が出現し、これが診断の決め手となります。

この頃が最も人にうつりやすい時期です。

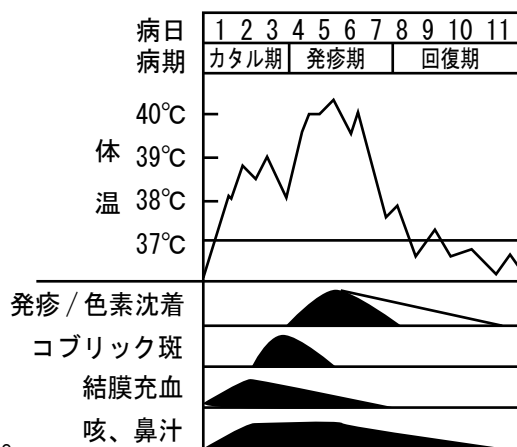
その後いったん熱がやや下がりますが、半日ぐらいで再び39℃以上の高熱が出て、同時に発疹が顔から全身に広がります（発疹期）。

せき、鼻水、目やになどは一層強くなります。

発疹期が4～5日続いた後、熱は下がり、せき、鼻水、目やになどは軽くなってきます。

発疹は黒ずんで（色素沈着）、消えていきます（回復期）。

麻疹の臨床経過



★はしかにかかると、肺炎（4～7%）や中耳炎（5～15%）を合併することが多く、脳炎もまれに（1000～2000人に1人）みられます。脳炎は死亡率が高く（約15%）、また助かっても、けいれん、麻痺、発達の遅れなどの後遺症を残します（約20～40%）。これらの合併症は、年齢が低いほどおこしやすいのです。

亜急性硬化性全脳炎（SSPE）という特殊な脳炎も、非常にまれですが（10万人に1人）、麻疹ウイルスが原因でおこります。この脳炎は、はしかにかかってから約7年後に発症します。知能低下（痴呆のような症状）、運動障害、けいれんなどがみられ、しだいに進行して、寝たきりとなり、最終的には死亡しています。

★麻疹ウイルスに効く特別な薬はありません。解熱剤、せき止め、2次感染予防のための抗生剤などの対症療法を行いながら、自然になおるのを待つしかありません。

★もし、お子さんがはしかになってしまった場合

家庭での注意：

「はしかは、あたたためろ」は、まちがいです。熱が続くときは、冷やしてあげましょう。

咳がはげしいときは、加湿しましょう。

脱水をおこしやすいので、こまめに水分をあげましょう。

食事は、本人が食べやすい消化のよいものにしましょう。

病院にかかるときの注意：

人にうつりやすい病気なので、体に発疹がでて、「はしかかな?」と思ったら、あらかじめその旨を受付へ言って、看護婦さんの指示に従い、他のお子さんから離れた場所で待ちましょう。

登園、登校について：

熱が下がって3日したら、保育園、幼稚園、学校へ行けます。*

★はしかは、一生に一度はかかる病気ではなく、かからないようにする病気です。はしかは非常に重い病気で、いったんかかると、たとえ合併症がなくても、約10～14日間保育園、幼稚園、学校を休まなければなりません。

そこで、はしかワクチン接種による予防が非常に大事です。

現在日本で使用されているはしかワクチンの接種による免疫ができる率は（抗体陽転率）は97～98%で、はしか予防効果は非常に高いものです。アメリカはワクチン接種率がほぼ100%近く達成され、年間の患者数は100人未満となり、はしか制圧にほぼ成功しています。

一方、日本のワクチン接種率は70%前後（1歳児の接種率は約50%）で、世界の中でも低く、はしかワクチンに関しては後進国といえます。*

※ はしかワクチン接種は、1歳になったら、できるだけ早くしましょう（公費負担）。

もし、はしか患者と接触した場合、2日以内にワクチン接種をすれば発症を予防でき、たとえ発症しても症状が軽くてすみます。

1歳未満でも、ワクチン接種が可能（有料）ですので、近くで流行している場合、保育所に入る場合は、かかりつけの先生へ相談してください。

